

サライ美奈（著）

『ハンガリー たっぷりあそび就学を見通す保育
——一人ひとりをたいせつにする具体的な保育——』

2014年 かもがわ出版 A5判 168頁 定価（本体1,800円＋税）

ケレケシュ ジュジャ^{*}

本書は2014年に刊行された著者の初めての単行本である。サライ美奈は保育士養成短期大学を卒業後、3年間ハンガリーに留学し、帰国後保育士として活躍したが、最終的にハンガリーに移住した。現在、ハンガリーの西南部に位置しているジェネシュディアーシュで夫と3人の息子とともに生活しており、日本在住の町田千秋と2人で「くるみの木の教育研究所」を主催している。2010年に設立された「くるみの木の教育研究所」は、日本・ハンガリー両国で活動し、セミナーや研修の企画・コーディネート、講師活動、保育指導、翻訳、出版物の制作、日本の保育士向けに保育季刊誌の発行などを行う。そしてハンガリーの幼児教育や就学前教育を紹介しながら、これからの日本の保育と幼児教育を考えるブログも運営している。

本書では、主にハンガリーの乳児保育園と幼児保育園の様子、習慣や特徴、そしてハンガリーの保育園制度が解説されている。本のまえがきでは、日本の保育者を対象として書かれたと言及されているが、ハンガリーの簡単な紹介から、ハンガリーの保育園の概要を簡潔に述べており、たくさんの図や写真が入り、保育者以外の読者にも大変読みやすい一冊である。著者は、本書を読む上で必要となる関連知識について基礎から解説しており、読者が本書を読み進めるにつれて、ハンガリーにおける就学前教育への認識を自然と深められるように構成されている。一般的な保育園の設備、一日の流れ、各年齢の子どもの過ごし方など多くの解説を加えながら、ハンガリーの保育園の特徴を明らかにしている。

本書は大きく分けると二部構成になっており、第一部はサライ美奈が書いた「ハンガリーの保育・就学前教育」で、第二部はユリア（水野裕子）の「一人ひとりをたいせつにする具体的な保育——ハンガリーの保育と出会い、へきなん保育園で実績して」というエッセイである。序章では、本書の写真で撮られている4つの保育施設を紹介している。クマのプーさん乳児保育園（Micimackó Bölcsőde）、マイバ乳児保育園（Mályva Bölcsőde）、マイバ幼児保育園（Mályva Óvoda）、人生の樹幼児保育園（Életfa Óvoda）である。続いてユリアが書いた序言では、ハンガリーの保育の魅力としては、「自尊感情や自己肯定感を育てる」という特徴、または「子どもの人格を認めたいうでの保育」であるということが指摘されている。

第一部では、1章～4章にわたって「ハンガリーの保育・就学前教育」が紹介されている。第1章は、著者の家族を支えてきた保育の魅力について述べられている。著者は異国での子育ての難しさを述べ、その中でもハンガリーの保育の特徴に焦点を当てる。その一方、ハンガリーの保育の利点として挙げられているのは、日常の保育の中でハンガリーの伝統行事や文化をきちんと取り上げているため、子どもたちはそれぞれの家庭環境の違いにかかわらず、平等に生活の基本を学ぶことができる、ということである。また、「一人ひとり違う」という概念が大切にされ、お互いを比べ合う必要はないことや自分に合う場所を探す重要性が子どもに教えられ、こうして生まれる個性が子どもの人格形成に反映していくと言う。そして、女性が働くのはあたりまえであるハンガリーでは、母親へのサポートネットワークが充実しているという利点も強調されている。

本書の心臓部分となる第2章は、ハンガリーの乳児保育園、幼児保育園、保育士の特徴を11のテーマで具体的に述べている。第1節では、「遊びと発達」がテーマで、ハンガリーの保育園では「あそび」が子どもの最も重要な課題であると指摘する。第2節では、「運動発達とその他の条件」が述べられている。

^{*} お茶の水女子大学大学院博士後期課程

第3節では、「空間と環境（コーナーと遊具）」の特徴に焦点を当てる。第4節では、「流れる日課」が紹介され、その利点として、子どもが急かせられることなくゆっくり過ごせること、子どもが待つ時間が省かれ、あそびの時間が十分に保障されること、子どもが一日を見通し、変化を受け入れやすくなることなどを指摘している。第5節では、「担当制（乳児）」のタイトルで、育児の場面で、同じ人が同じように関わってくれることで、子どもは先を読み取り、安心して任せ、自ら行動を取ることができるようになり、自分の面倒を見てくれる人に愛着を感じるようになる、と述べられている。第6節では、ハンガリーの幼児保育園の約半数で実施されている「異年齢混合保育（幼児）」について詳解させる。第7節では、ハンガリーでの「慣らし保育」の流れが説明されている。第8節では「課業（設定保育）」についてである。一週間のうちに課業として環境認識・体育・文学・音楽/わらべうた・描画が行われており、流れる日課の中での保育者の仕事に焦点が当てられている。第9節は、「芸術教育（音楽/わらべうた・文学・描画/工作/手仕事）」についてである。第10節では、「給食・食事」がテーマで、お昼ご飯の内容、食事の雰囲気や食器、アレルギー食の対応などについてまとめられている。最後の11節では、「乳児保育園・幼児保育園・保健師制度」について取り上げられており、2014年度より、3歳以上の子どもは義務教育として入園することが閣議で決定された、と著者は報告する。

第3章においては、以上の章で紹介されたハンガリーの保育園の社会的、歴史的背景や教育制度全体が説明されている。第1節は、乳児・幼児教育の基本プログラム、それぞれの特徴や共通点、相違点を明らかにする。第2節は、「学校教育制度」の細かい説明である。続く第3節では、「保育士養成」が述べられ、著者は、乳児保育士と幼児保育士それぞれの適性テスト、養成課程、授業科目、実習形態、研修期間について簡単に要約する。最後の第4節では、ハンガリーの文化、伝統、地理的条件も含めて、保育のあり方に影響を与える歴史的、社会的文脈が指摘されている。第一部の最後には、ハンガリーの保育をテーマとするセミナーで、著者が日本の保育者によく聞かれる質問の収集とその回答が載っている。

続く第二部になる5章は、愛知県にある「へきなん保育園」の園長を務めるユリアが加えたエッセイである。コダーイメソッド（ハンガリーの音楽教育者であるコダーイ・ゾルターン(1882=1967)が創造した、わらべうたで子どもを発達させる方法）との出会いをきっかけに、へきなん保育園の保育全体を見直すことにしたという。本章では、まさにその取り組みの実践を語る。2009-2014年にかけて、ハンガリーの保育について勉強しつつ、そこで見てきた保育室の環境、保育士担当制、流れる日課、食事習慣、午睡習慣、独特な言葉かけなどをへきなん保育園の保育に取り入れた。ハンガリーの保育を見て、そこから得た示唆を以下のようにまとめる。第一に、一人ひとりと丁寧に接する担当制が子どもの信頼感に良い影響を与える点。第二に、流れる日課を取り入れることにより、全員一斉に同じことをしないので、子どもが待っている時間が劇的に減るという点。第三に、それぞれ子どもが自分の要求によるタイミングで行動し、小さな子どもでも自分の生活の見通しがつくようになる点。最後に、ユリア自身の言葉で結論を述べると、「決まった方法や形に固執するのではなく、子どもの状態によって常に保育を工夫して進化させるということ」が重要である。そして、保育士が「ハンガリーから学ぶということ、それは決して形をまねず、それぞれの状況に応じて、それぞれのペースで吸収し、実践に繋げるとよい」と言う。

本書は、ハンガリーにおける就学前教育の実現形態とその実行過程を読みやすい形で解明しようとし、そして幼児教育に影響を与えた歴史的、文化的、社会的状況についても簡単に理解させようとする。著者は保育の各要素を取り上げながら、ハンガリーの特徴点を手際よくまとめる。ハンガリー出身の評者から見ると、著者のハンガリーにおける幼児教育への深い理解と熱情が本書から十分に伝わる。今までの日本におけるハンガリー教育に関する研究を調べると、音楽教育や言語教育に留まる傾向があったが、就学前教育に焦点を当てる研究はそれほど生まれてこなかったと言える。そのような中で、本書の誕生と著者の活躍は嬉しい限りである。誰もが気軽に手に取ることのできる書籍として刊行された本書は、今日の保育と幼児教育現場の改善を考える読者にとっては、非常に興味深い一冊であり、一読をお勧めする。